芥川龍之介「舞踏会」

——鑑賞指導にそなえて——

森本　修

一

芥川龍之介の作品は、中学校・高等学校の教科書に多く採られているが、「舞踏会」も昭和四十二年度使用高等学校教科書の角川書店『高等学校現代国語　一　改定版』（単元・近代の小説　一）、秀英出版『現代国語　二　改定版』（単元・短編小説）に採用されている。

「舞踏会」は、大正九年一月『新潮』（二八八～二九六頁）に発表されたもので、後に第五短編小説集『夜来の花』（新潮社　大10・3）に収められた。『夜来の花』に収められる際、部分的（特に結末の数行）に加筆され、『新潮』に掲載されたものと、現行の全集や教科書に収められているものには異同がある。（この点については後述）。

執筆年月については、『新潮』掲載の本文末尾に（八・十二・）と記されているところから、大正八年十二月に成ったものと考えられる。一体、芥川の筆は決して早い方ではなかった。一つの作品が完成するまでには、題材を変えたり、描写法を変えたりして、思うように捗らないのは常のことで、病気などを理由に約束の締切日を過ぎることが多かった。「舞踏会」もその例外ではなく、十二月十四日になっても他の新年号の原稿共々出来上らず、「毎日催促されてはうん〳〵云ってゐる始末」（大8・12・14付　岩野英枝宛）であったが、十七日には「やつと今日で新年ものが書き上げられる筈だ」（大8・12・17付　滝井孝作宛）という見通しがついた。ところが、翌十八日には当時『新潮』の編集者をしていた水守亀之助に、「新潮の原稿御約束しました所昨夜より急に発熱し今日猶床に就いてゐます医者曰流行性ではないが風邪だらうと、それ故どうも執筆する勇気が起りません昨晩も半枚書いて見た所熱が八度になつたので止めました右様の次第に就き寄稿の件は不悪御容赦下さい」と断りの手紙を出しているが、芥川の引延ばし戦術を心得ている水守には通じなかったのか、結局は数日遅れて書き上げ、辛うじて新年号に間に合ったものらしく、一週間後

には「私も新年号の小説を書く為風流地獄の苦を受けましたが幸どうにか身命を完うして居ります」（大8・12・25付　龍村平蔵宛）といっている。締切日を過ぎ、切羽詰まってから一気に書き上げるのも芥川の特技で、「片恋」（文章世界　大6・9）は一日半、中学校の教科書に多く採られている「トロツコ」（大観　大11・3）は一晩、「死後」（改造　大14・9）は一日で書き上げたという。[注1]

ところで、「舞踏会」がピエル・ロティ（Pierre Loti　本名ルイ・マリ・ジュリアン・ヴィオ Louis Marie Julien Viaud）の日本紀行『日本の秋』（Japoneries d' automne）の中の一篇「江戸の舞踏会」（Un Bal a' Yeddo）を種本にしていることは夙に知られている。芥川には、「ピエル・ロテイの死」（続野人生計事）という文章があり、また「サア・オルコックの日本紀行は、ロティやキプリングのそれのやうに、芸術的色彩には富んでゐない。例へば浅草を描くにしても、ロテイの『日本の秋』の中の浅草のやうに、目のあたりに、黄ばんだ銀杏だの、赤い伽藍だのが浮んで来ないことは事実である。」（日本の女）、「唯僕のロテイの本で面白く思つたのはあの日本人が皆ロココの服装をしてゐる事です。つまりあの舞踏会はワトウの匂のある日本だつたのですね。」（大14・11・13付　神崎清宛）とあるように、『日本の秋』就中「江戸の舞踏会」を読んでいたことは確実である。フランス海軍大尉ジュリアン・ヴィオは、明治十八年（一八八五）七月、練習艦トリオンファント号艦長として来日し、十二月下旬まで滞在した。その間の体験を素材にして成ったのが『日本の秋』『お菊さん』（Madame Chrysanthème）である。『日本の秋』は、一八八七年からパリの雑誌に時折り発表されたものをまとめたもので、一八八九年三月カルマン・レヴィ社から刊行された。『日本の秋』の邦訳としては、早く飯田旗郎の『陸眼（おかめ）八目』（春陽堂　明28・12）があり、次いで高瀬俊郎の『日本印象記』（新潮社　大3・11）がある。また、「江戸の舞踏会」に限れば、これも早く眼花道人の「江戸の舞踏会」（婦女雑誌　明25・3）がある。[注2] 芥川がこの作品を書くにあたって参考としたものとして高瀬の『日本の印象記』をあげる説と、英訳本によったのであろうとする説とがある。[注3] 前者の根拠としては、『日本印象記』の巻頭に〈解題〉として、

彼が日本を訪れてこの一篇（原名『日本の秋』）を書いたのは、明治十九年の秋の末で、彼は其時短かい口髭を生やして軽快な海軍の制服をつけた一青年士官であつた。（傍点筆者）

とあるのによって、芥川が「舞踏会」の冒頭に

明治十九年十一月三日の夜であつた。（傍点筆者）

と書き、更に女主人公明子とダンスをする仏蘭西の海軍将校を、

頬の日に焼けた、眼鼻立ちの鮮な、濃い口髭の男であつた。（傍点筆者）

と書いているところによるとするもので、芥川が高瀬訳の『日本印象記』を読んで興をひかれ、それに題材を得て構想をねり、原作通りの時と場所と人物を選び、視点を原作とは逆に日本人の女性の側におき、原作のカリカチュア化された女性を美化し、原作の辛辣な味わいの代りに、抒情的な色調をもって満たしたとする。

これに対して、『陸眼八目』も『日本印象記』も、共に「粉飾された大づかみの訳文」で、小説の種本とするに相応しくないこと、芥川の「舞踏会」の舞台となっている天長節舞踏会にロティが出席する機会があったのは、明治十八年（一八八五）でしかなかったのに、芥川は明治十九年（一八八六）としていること、「ロティの口髭」も彼の肖像を見れば当然描き得るものである。芥川は英訳本によって原作の細部まで知悉し、その微妙なニュアンスを悉く読み取った上で構想したのであろうとするのが後者[注4]である。芥川の外国文学に対する造詣は、殆ど英訳本によったものであるところから、ロティの場合も英訳によって読んだ可能性は十分にあるが、手近かなものとして高瀬の『日本印象記』にも眼を通したことも考えられ、二者のいずれを是とすることは出来ない。

前述のように、「舞踏会」の舞台は明治十九年十一月三日に鹿鳴館で催された天長節舞踏会の夜にとられている（参考・三島由紀夫の「鹿鳴館」〈文学界　昭31・12〉も、当夜の鹿鳴館を主舞台に新時代の政治的抗争の中に繰り広げられる肉親葛藤の人間模様を描き出している）。ここで当時の社会的背景について少しふれておこう。明治十二年（一八七九）九月、寺島宗則の後をうけて外務卿となった井上馨は、諸外国との条約を改正するために、秘密裡に列国公使との交渉をすすめ、十九年（一八八六）五月から東京で列国共同の条約改正会議を開いた。この間、井上らの政府高官は、条約改正の目的を達成するために諸外国の外交官にわが国の欧化ぶりを認めさせ、社交を円滑にする一つの方策として、明治十四年（一八八一）一月、東京内幸町に煉瓦造り二階建の西欧風社交場の建築に着工した。そして、二年半の歳月と十八万円の工費を要して落成したのが鹿鳴館である。鹿鳴館が出来て以後、上流社会では西欧模倣の舞踏会、慈善会などが流行し、洋装が普及した。中でもダンスは総理大臣伊藤博文が率先して習う熱心さで、鹿鳴館では外人教師を招いてダンスの練習会が開かれた。このようにして、「鹿鳴館時代」と呼ばれる欧化運動が繰り広げられ、上流社会では連日連夜のように舞踏会が催された。舞踏会は、鹿鳴館だけではなく、総理大臣官邸、芝浜離宮内の延遼館などでも盛んに催されたが、その最も盛大であったのが、この作品の舞台となっている明治十九年（一八八六）十一月三日の井上外務大臣の招宴による天長節大夜会であった。新聞記事[注5]によると、当夜は皇族、諸大臣、各国公使をはじめ、朝野の貴顕紳士およそ千六七百人が招かれ、年々増加する新西洋下りの紳士と、ダンスに身を入れ洋装で美を競った女性が、「コードリル、ワルス、ランサーフ、ポルカ」を踊り、二十日午前一時に散会したという。

ところで、前述のようにロティが来日したのは明治十八年（一八八五）で、したがって彼が天長節舞踏会に出席出来たのは、この年をおいて他になかった筈である。ところが、芥川はこれを明治十九年（一八八六）としている。このことは、あながち芥川の錯誤ばかりではなかったようで、ロティ自身「江戸の舞踏会」の結末に、

光輝ある一八八六年〔明治十九年〕　Muts-Hito 天皇の御誕

生日の御祝いに、菊花で飾られ、ロク・メイカンで催された、舞踏会の実状を読むことは。

と記している。明治十八年（一八八五）七月から十二月までの間しか滞日しなかったロティが、自分の出席した舞踏会をなぜ一八八七年としたのかは明らかではない。現にロティは、『日本の秋』の中の一編「観菊御宴」では、観菊会の招待状の日付を「メイジ十八年十一月四日」と記し、九日の観菊会で会った二人の女性について、

そのうちの一人は、優雅な微笑がなければ、その宮廷服のために見分けられなかったかもしれないが、外務大臣夫人の「イノウエ伯爵夫人」である。わたしは、彼女には、あの（鹿鳴館の）舞踏会で、彼女が長い裳裾をした薄紫のパリふうの衣裳をつけ、しかも、それをこのうえもなく上品に、気らくに着こなしているのを見たことがあるだけだが……もう一人の、若い人のほうにも、わたしは前に会ったことがある！――「ナベシマ侯爵夫人だ！」わたしは、彼女といちど光栄にもワルツを踊ったという記憶さえある。

と、つい先頃舞踏会で会ったばかりの女性の記憶を新たにしている。この年の錯誤について三好行雄[注6]は、「登場人物の誰をも傷つけないよう」に、ミョーゴニチ嬢やカラカモコ嬢などの匿名をつけたロティのそれと同じ配慮にもとづく小説的虚構なのか、或いはロティの来日の年次について従来の説を改めるべきなのか、いずれにしても推測の手だてはまったくないとしている。この点についてはいま少し調査を要する。

注1　「片恋」は、九月十日が原稿締切日であった。大正六年九月十六日付の太田黒元雄宛の書簡に、「今うん〳〵云つて文章世界の原稿を書いてゐます」とあり、「片恋」の末尾に〔九月十七日稿〕と記されている。そして、九月二十日付の松岡譲宛の書簡に、「ボクは文章世界で実際脂をしぼられたよへんてこなものを書いて責をふさいぢやつたいくら何でも一日半ぢや碌なものは書けない」とあるところから、「片恋」は九月十六日から十七日にかけての一日半で執筆されたと推定される。また、「トロツコ」は、大正十一年二月十六日の佐佐木茂索宛の書簡に、「ボクも大芸先生にかぶれ今夜一夜に小説一篇を作った岡の為に大観へのせるつもり」とある。もっとも、「トロツコ」は当時改造社の校正係をしていた力石平三の原稿をもとにしたといわれている（滝井孝作「純潔」改造　昭26・1）。「死後」は、大正十四年九月十七日付の滝井孝作宛の書簡に、「『死後』はメ切り前一日で書いた」とある。

注2　国立国会図書館編『明治・大正・昭和翻訳文学目録』（昭34・9）による。

注3　河盛好蔵『ふらんす手帖』、安田保雄『評釈現代文学』芥川龍之介』（西東社昭31・5）、「芥川龍之介『舞踏会』――構成について――」（国文学　昭41・5）

注4　三好行雄「『舞踏会』について――芥川龍之介へのアプローチI――」（立教大学日本文学、第八号　昭37・6）

注5　新聞集成明治編集史編纂会『新聞集成明治編年史』第六巻（財政経済学会昭10・10）三百五十四頁　東京日日新聞　明19・11・5記事。

注6　前掲・三好行雄「『舞踏会』について」

二

さて、「舞踏会」は、

明治十九年十一月三日の夜であつた。当時十七歳だつた――家の令嬢明子は、頭の禿げた父親と一しよに、今夜の舞踏会が催さるべき鹿鳴館の階段を上つて行つた。明い瓦斯の光に照らされた、幅の広い階段の両側には、殆人工に近い大輪の菊の花が、三重の籬を造つてゐた。菊は一番奥のがうす紅、中程のが濃い黄色、一番前のがまつ白な花びらを流蘇（ふさ）の如く乱してゐるのであつた。

という書き出しではじまる。この部分が、「江戸の舞踏会」の、

サロンは二階である。で、わたしたちは、故国の秋の花壇では思いもよらぬ日本のキクの三重の籬、すなわち白い籬、黄色い籬、うす紅の籬でふちどられた、広い階段を通ってそこへ上っていく。

によつていることは明らかである。なお、参考までに明治十九年（一八八六）十一月三日の天長節大夜会の新聞記事[注1]には、

館の周囲及庭園には瓦斯燈と球燈とを建て懸け幷べたれば、宛がら白昼の如し、（中略）其の正面の楼下には庭園の様を仕（しつ）らひて、菊の花壇を設け、五色の花各半ば笑みを含みて客を迎ふ、壇階子の手摺にも菊花を飾り、右側の壁に沿ひて一列に同じ花を植ゑ付けたり、（中略）扨楼上の正面なる壁には一坪余もあらんと思しき造り菊の扇子をかゝげ、緑色の扇面に白菊の花にて Welcome（恭侍）の一字を造り出したるは、殊に目醒ましく見えし、

とある。

「舞踏会」の女主人公――家の令嬢明子は、

初初しい薔薇色の舞踏服、品好く頸へかけた水色のリボン、それから濃い髪に匂つてゐたつた一輪の薔薇の花

という装いで登場する。これも、「江戸の舞踏会」に、

わたしの踊り相手のなかでいちばん優しいのは、はでな花模様のある淡いバラ色の服を着た小柄な人――年はせいぜい十五歳ぐらいの――日本のもっともりっぱな一工兵将校の令嬢である（ミョウゴニチ嬢か、それともカラカモコ嬢だったのか、もうわたしにはよくわからない）。

によつたのであろう。なお、明子について三好行雄は[注2]、「舞踏会」と同じ〈開化物〉の「開化の殺人」（中央公論　大7・7）の甘露寺明子のちの本多子爵夫人（H夫人）、「開化の良人」（中外大8・2）に登場する本多子爵の夫人との関連をみているが、筆者はむしろこの二作品とは別に、「ミョウゴニチ嬢＝明後日嬢＝明子」にひっかかりを感じる。

明子は夙に仏蘭西語と舞踏との教育を受けてゐた。が、正式の舞踏会に臨むのは、今夜がまだ生まれて始めてであつた。だから彼女は馬車の中でも、折々話しかける父親に、上の空の返事ばかり与へてゐた。それ程彼女の胸の中には、愉快なる不快とでも形容すべき、一種の落着かない心もちが根を張つてゐた

のであつた。彼女は馬車が鹿鳴館の前に止るまで、何度いら立たしい眼を挙げて、窓の外に流れて行く東京の町の乏しい燈火を、見つめた事だか知れなかつた。

この部分も、「江戸の舞踏会」でシバシ（新橋）停車場から人力車に乗つて鹿鳴館に向うロティの眼に映じた東京の街並みの描写、

あまり明るくないひっそりとした郊外の街なかを。わたしたちの周囲の眺めは、もはや停車場の広場とは似ていない。暗い夜のなかを、これらの街や道すじの両側に、いますばやく去来するものこそ、まさに真の日本である。（中略）闇のなかにぽつんぽつんと、色のついた小さな灯を投げているへんな提灯。

を参考としたものだろう。ここで芥川は、馬車に乗って鹿鳴館の舞踏会に向う明子が抱く、未知の世界への期待と不安の交錯する落着かない気持ちを描き出している。[注3]それは、正に十七歳の明子の「人生への出発」に他ならなかつた。そして、読者は明子共々「窓の外に流れて行く東京の町の乏しい燈火」によつて象徴される過去の現実から、華やかな世界へと入つていく。鹿鳴館に着いた明子は、階段を上って二階の舞踏室に向う途中、「辮髪を垂れた支那の大官」に出会う。これも、「江戸の舞踏会」に、

十時、大清国の大使一行の入場。矮小な日本人の全群衆の上に頭をぬき出し、嘲けるような目つきをした、この十二人ほどの尊大な連中。（中略）辮髪などを墨守して、良い趣味と威厳とを表わしている。

芥川龍之介「舞踏会」

という記述を参考としたのであろう。

前述のように、当夜の舞踏会の主催者は外務大臣伯爵井上馨であつた。「江戸の舞踏会」では、

この段階を上ると、四人の人物――主催者たち――が、微笑を浮かべながら、客間のそれぞれの入口で招待客を待ちうけている。白い襟飾りをつけ、いくつもの勲章をつけた、大臣に相違ない一人の紳士に、わたしはさまで注意をはらわなかったが、そのかたわらに立っている三人の女性には、すぐ好奇心で目を注いだ。とくに最初の女性こそは、明らかにあの「伯爵夫人」であるに相違ない。ついさっき汽車のなかで、わたしはこの夫人の身の上話を人々から聞いたのである。彼女はもとゲーシャだったが、大臣に出世する途中の一外交官に見そめられ、落籍されてその妻になり、そしていまでは、外国公使たちの社交界において、エドの花形たる役割をになっているのだそうである。

と記されている。「舞踏会」でもこの部分をそつくり借用して、

二人が階段を上り切ると、二階の舞踏室の入口には、半白の頬鬚を蓄へた主人役の伯爵が、胸間に幾つかの勲章を帯びて、路易十五世式の装ひを凝らした年上の伯爵夫人と一しよに大様に客を迎へてゐた。

と書かれている。

明子と父親とは、伯爵に挨拶を交すが、明子はその間に、

権高な伯爵夫人の顔だちに、一点下品な気があるのに感づくだけの余裕があつた。

としている。

ここで芥川は、今では社交界の花形となつている井上馨夫人が嘗て芸者であつたというロティの記述を見逃がしていない。

舞踏室に入つた明子は、「水色や薔薇色の舞踏服を着た」「綺羅びやかな婦人たちの或一団」に加わつた。すると、見知らない仏蘭西の海軍将校が歩みより、「両腕を垂れた儘、叮嚀に日本風の会釈」をして、「異様なアクサンを帯びた日本語」で、「一しよに踊つては下さいませんか。」といつた。ロティは日本語を話せたらしいことは、「江戸の舞踏会」に

わたしの日本語は令嬢たちを驚かせる。

とあり、その言葉も

自分を高尚に見せようとして、わたしは優雅な語法とデゴザリマスという敬語の動詞変化とを使つてみる。

とある。また、挨拶については、

手を膝に置き、からだを二つに折り曲げて、日本流のお辞儀を交わす。

と記されている。

明子は、海軍将校と「美しく青ダニウブ」を踊り、更にポルカやマズユルカを踊った後、「白と黄とうす紅と三重の菊の籬の間を、階下の広い部屋へ下りて行つた」。

此処には燕尾服や白い肩がしつきりなく去来する中に、銀や硝子の食器類に蔽はれた幾つかの食卓が、或は肉と松露との山を盛り上げたり、或はサンドウイツチとアイスクリイムとの塔を聳てたり、或は又柘榴と無花果との三角塔を築いたりしてゐた。殊に菊の花が埋め残した、部屋の一方の壁上には、巧な人工の葡萄蔓が青々とからみついてゐる、美しい金色の格子があつた。さうしてその葡萄の葉の間には、蜂の巣のやうな葡萄の房が、累々と紫に下つてゐた。

この部分は、「江戸の舞踏会」の次の部分をそつくり借用したものである。

わたしたちがいっしょに踊っていた「美しく青きダニューブ」のワルツが終ると、つぎの二つのワルツも踊ろうとして、わたしは彼女の手帳に自分の名まえを書く。（中略）人々は、白い花、黄色い花、うす紅の花の美しい三重の籬でふちどられた階段を通って、ときどきそこへおりてゆく。銀の食器類や備えつけのナフキンなどでおおわれている食卓の上には、ショウロを添えた肉類、コロッケ、サケ、サンドウィッチ、アイスクリームなど、ありとあらゆるものが、れっきとしたパリの舞踏会のように豊富に盛られている。アメリカとニホンのくだものは、優美な籠のなかにピラミッド型に積み重ねてあり、しかもシャンパン酒は最高級のマークの品である。この戸棚には、みごとなブドウの実が下がっている、人工の蔓のまきついた金色の格子垣の人形じみた葉むれがある、

そこの食卓の一つで明子は海軍将校とアイスクリームを食べる。この頃には、明子は華やかな舞踏会の雰囲気にすっかり溶けこんでいた。そしてアイスクリームを食べている間、海軍将校の眼が

「彼女の手や髪や水色のリボンを掛けた頸へ注がれてゐる」のに気付くゆとりがあった。「それは勿論彼女にとつて、不快な事でも何でもなかつた。が、或刹那には女らしい疑ひも閃かずにはゐられなかつた」。そこで明子は、この疑いを閃かせる為に「西洋の女の方はほんとうに御美しうございますこと。」という。すると海軍将校は思いの外真面目に、「日本の女の方も美しいです。殊にあなたなぞは――いえ、御世辞ではありません、その儘すぐに巴里の舞踏会へも出られます。さうしたら皆が驚くでせう。ワツトオの画の中のお姫様のやうですから。」と答えた。ところが、この海軍将校の賛辞も、宮廷生活に取材した艶雅典麗な風俗画、歴史画を主に描き、十八世紀の絵画をロココ様式に導いた仏蘭西の画家ワットオを知らない明子には通じなかったのである。「江戸の舞踏会」には、ワットオの名は出てこない。こゞこにワットオを引合いに出したのは、前掲の神崎清宛の書簡にみえるように、ロティの「江戸の舞踏会」に描かれた「ワトオの匂のある日本」に芥川が興味をもち、それがこの作品を執筆する一つの動機となったことと考え合わせるべきであろう。

それから一時間の後、明子と海軍将校は「レエスの花の波が、十六菊を染め抜いた紫縮緬の幕の下に、休みない動揺を続けて」いる舞踏室を後にして、露台に佇んでいた。そして、星月夜へ黙然と眼を注いでいる海軍将校に「お国の事を思つていらつしやるのでせう。」と半ば甘えるように尋ねてみた。丁度、その時夜空に花火が開いた。

この部分も、「江戸の舞踏会」の、

空中には、ミカドの紋章をつけた幟、白いキクのご紋をちりばめた紫ちりめんが絶えずひるがえっている。（中略）わたしの腕にもたれているカルパントラスかランデルノーの小さな田舎娘は、デゴザリマスを使って、夜の涼しいことや明日のお天気模様について、すこぶる鄭重な事がらをわたしに話しかける。（中略）一方、下では、庭のはずれ、噴水の後ろで、仕掛け花火の風変りな最後の打揚げが炸裂し、このロク・メイカンのまわりに詰めかけていた日本人の観衆を一人残らず照らし出す。

という記述を参考としたのであろう。

蜘蛛手に闇を弾く赤と青との花火。それは、その夜の舞踏会のクライマックスであった。期待と不安の交錯する気持ではじめて出席した華やかな舞踏会、仏蘭西海軍将校にいたわられながら楽しく過ごした舞踏会も、間もなく終りを告げ、闇に弾いた花火のように、美しく楽しかった幻となろうとしている。そこで、「明子には何故かその花火が、殆悲しい気を起させる程それ程美しく思はれた」。その時、海軍将校は優しく明子の顔を見下しながら

「私は花火の事を考へてゐたのです。我々の生のやうな花火の事を。」

と、教えるような調子で彼女の言葉に答えたのである。「舞踏会」の〔一〕は、この海軍将校の言葉で終る。そして、この言葉にこの作品の主題をみるのが大方の説である。この言葉は、「江戸の舞踏会」で炸裂する花火と、乱調子に奏でるオーケストラに

包まれた「前代未聞の混乱」の中で、

全世界が、この瞬間、縮小され、凝結され、結合され、そしてまったくこっけいなものに変わったように

感じたと記しているロティの気持に一脈通ずるものがある。しかし、〔一〕の末尾の言葉は、このロティの感慨をヒントにしたであろうが、吉田精一や三好行雄の説くように、[注4]人生の最高の価値を「刹那の感動」にあると考え、「地獄変」（大阪毎日　大7・5）に娘を焼く焔の前に立ちつくす良秀の「恍惚とした法悦の輝き」を描き、「奉教人の死」（三田文学　大7・9）に「なべて人の世の尊さは、何ものにも換へ難い、刹那の感動に極るものぢや。」と書き、「或阿呆の一生」（改造　昭2・10）に「凄じい空中の火花だけは命と取り換へてもつかまへたかつた」と思った芥川の人生観を示すものとして捉えるべきであろう。

〔二〕は〔一〕の舞踏会があった三十年後の大正七年秋、鎌倉へ向う列車の中に場面が変る。一面識のある青年作家と乗り合わした明子（H夫人）は、青年が編棚に置いた菊の花束を見て、菊の花を見る度に思い出す話があるといって〔一〕に書かれた鹿鳴館の舞踏会の思い出話を聞かせたのである。そこで、青年が「奥様はその仏蘭西の海軍将校の名を御存知ではございませんか。」と尋ねる。「するとH老夫人は思ひがけない、返事をした」。以下、結末のH夫人の言葉は、前述のように『新潮』初出の際、

「存じて居りますとも。Julien Viaud と仰有る方でございました。あなたも御承知でいらつしやいませう。これはあの『御菊夫人』を御書きになつた、ピエル・ロティと仰有る方の御本名でございますから。」

となっていた。つまり、明子（H夫人）はダンスの相手の海軍将校ジュリアン・ヴィオがピエル・ロティであることを知っていたというのである。しかし、人生の一齣を色どった花火に似た華やかな舞踏会の夜の感動を、過去の美しい思い出として心に抱く明子（H夫人）にとって、その夜の相手であったのがピエル・ロティであったかどうかは問題ではなかったのである。初出の文章と改作された現行の文章のいずれが小説としての効果を高めているかは、改めていうまでもなかろう。この点については、吉田精一や三好行雄の説いたものがあるのでここではくわしくはふれない。[注5]

「舞踏会」のように前半で起こった事件を後半で振り返ってみるという手法は、他に「お富の貞操」（改造　大11・5・9）や「トロツコ」などでもとられている。芥川の歴史小説が昔の再現を目的としていなかったように、「舞踏会」も明治十九年十一月三日の天長節大夜会における明子と仏蘭西海軍将校との思い出の再現のみを目的としたものではない。初々しい小鳥のように可憐であった少女の頃の、美しく楽しく感動に包まれた一夜の出来事は、五十歳を迎えようとしている明子と重なり合い、今日の自分をみているのである。こうした過去と現在の交錯する中で、芥川は所詮むなしい人生を捉えようとしたものであろう。

最後に、表現の点で二三気付くところをあげると、まず、

○彼女は手にしてゐた扇を預つて貰ふべく、隣に立つてゐる水

色の舞踏服の令嬢をふり返つた。
○彼女はその相手の軍服の左の肩に、長い手袋を嵌めた手を預くべく、余りに背が低かつた。
○明子には何故かその花火が、殆悲しい気を起させる程それ程美しく思はれた。

などの直訳体の文章が多く用いられ、アクサン、ヴァルス、メルシイのような仏蘭西語の多用と相俟て、「鹿鳴館時代」の雰囲気を再現するのに効果的な役割を果していること。今一つは、接続助詞の「が」が多用されていることで、十二例が数えられるが、特に、

○明子は夙に仏蘭西語と舞踏との教育を受けてゐた。が、正式の舞踏会に臨むのは、今夜がまだ生まれて始めてだつた。
○彼女は馬車が鹿鳴館の前に止るまで、何度いら立たしい眼を挙げて、窓の外に流れて行く東京の町の乏しい燈火を、見つめた事だか知れなかつた。が、鹿鳴館の中へはひると、間もなく彼女はその不安を忘れるやうな事件に遭遇した。
○彼女は羞恥と得意とを交る交る味つた。が、その暇にも権高な伯爵夫人の顔だちに、一点下品な気があるのを感づくだけの余裕があつた。
○それは勿論彼女にとつて、不快な事でも何でもなかつた。が、或刹那には女らしい疑ひも閃かずにはゐられなかつた。
○青年は愉快な興奮を感じた。が、H老婦人は不思議さうに青年の顔を見ながら何度もかう呟くばかりであつた。

などは、前後の文章が反対の意味になり、違った事柄に移る用い方として、微妙な心理の綾を巧みに描き出しているといえよう。

（文中引用した「江戸の舞踏会」「観菊御宴」は、村上菊一郎、吉氷清訳「秋の日本」〔『世界教養全集』7　平凡社　昭36・11所収〕によった。）

注1　前掲：『新聞集成明治編年史』
注2　前掲・三好行雄「『舞踏会』について」
注3　この部分について、安田保雄はトルストイの「戦争と平和」第六編の一八一〇年元旦の夜、皇帝臨御の下に行なわれた舞踏会に赴くナターシャを念頭に置いたのではないかとしている。（「芥川龍之介『舞踏会』――構成について――」国文学　昭41・5）
注4　吉田精一『近代文学鑑賞講座11芥川龍之介』（角川書店　昭33・6）百三十二～百三十三頁、三好行雄「『舞踏会』について」。
注5　相手の海軍将校が有名なロティであったといわれても、H夫人が平然としているのは、年若くしていち早く西欧文明の洗礼を受けた深窓の麗人も、西欧文学とは無縁のままに年齢を重ねたという皮肉であると共に、彼女の索漠として平凡なそれ以後の生活を暗示し、それによって人生のある瞬間に打上げられた花火の一閃にも似た舞踏会を、読者は一層美しく、叙情的に感ぜしめる効果をあげている（吉田精一『近代文学鑑賞講座11芥川龍之介』百三十五頁、「小説の鑑賞」角川書店『高等学校現代国語一改定版』所収）。ロティのエピソードとして受けとめた青年の興奮と、追憶の中に生きる明子の感動とは全く異質のものであり、両者を対比させることによって、明子と海軍将校の共有した鹿鳴館の一夜の感動の純粋性をより強め、明子の無償の感動の前で、青年の知的な興奮が如何に見すぼらしいかを示し、明子の不思議そうな呟きは、いわば〈知慧のむなしさ〉を痛切に語り明かしている（三好行雄「『舞踏会』について」。